

札幌新まちづくり計画市民会議 文化・人づくり分科会第3回会議

会 議 録

平成16年1月8日(木)午後6時開会
札幌市民会館 3階 第6会議室

1 開 会

事務局（企画部長） こんにちは。皆さんおそろいですので第3回文化・人づくり分科会を始めさせていただきます。それでは臼井先生お願いします。

臼井会長 改めまして、おぼんでございます。今日は終了予定8時半を目処に、途中で1時間くらいのところで休みをいれることにして進めたいと思います。

2 議 事

（2）前回までのまとめ

臼井会長 始めに資料1、前回の議論の整理についてご説明をお願いします。

事務局（北海道総合研究調査会） それでは資料1をご覧ください。

大きく「現状・課題の認識」「取り組みの方向」ということで整理し、皆さんのご意見から5つのキーワードを抽出しました。これは、皆さんの意見を分類、整理し、全体的な意見の関係を確認するための資料です。

現状・課題の認識は大きく3つのポイントで整理されるのではないかと思います。まず課題1としては「子孫のために100年後を考えたまちづくりに取り組む！」が提起されています。中身としては、まちの中の森や緑、あるいは水辺といった自然との共生を、これからの生活、文化の基本として据えていかなければいけないであろうということ。それと関連して、景観、環境に関わる自動車の問題も挙げられています。札幌らしい生活、文化を考えていく必要があるだろうということです。

課題2は、スポーツ活動と地域の生活・文化・自然との連携を深めることが、札幌のまちづくりにとって大事なことではないかということで整理させていただきました。そのためには、自然と接するためのツールとしてのスポーツの活用ですとか、自然と接する教育プログラムということがあります。ただ、地域のスポーツを支える人材と組織の連携が弱いという問題を抱えており、地域スポーツクラブを支えることをどう考えていくかが課題ではないかという意見が出されました。

課題3としては、小さな文化活動・表現の場をもっと広げていかなければならないということが出されました。それが地域コミュニティの活性化や子供たちの教育、あるいは不登校の子供たちの問題にも関係してくるということが提起されました。

この中で、いろいろな活動を実践されているお立場から、公共施設の使いにくさ、民間の施設にかかる興行場法などの規制といった問題があり、これらをもっと柔軟に変えていく必要があるのではないかというご意見がありました。また、不登校者を含めた子供たちの表現活動や教育、社会参加などに関わる民間の小さな場を支えていくような取り組みも必要ではないか。以上が課題3の整理したポイントです。

そういったことを踏まえつつ、取り組みの方向として大きく5つのポイントを挙げさせていただきました。

第1は、先住民族の英知をまちづくりに生かしていこうということです。自然との関

わり方、あるいは社会的規範のあり方について、アイヌ民族の哲学、知恵は、これからのまちづくりに非常に生かせる、あるいは大事な要素を含んでいるので、そういったところを教育の場でも子供たちにしっかり伝えていく必要があるということでした。

方向性の2は、課題2とも関連しますけれど、札幌独自の教育を展開していくということです。実験的な教育、札幌独自のユニークな教育を試みていく必要があるということです。また、学校だけではなく、地域コミュニティでの民間の文化的な活動と、教育機関の活動をもっと混在させるプログラムも展開していくということがありました。

方向3としては「市民が主体の文化活動を育てる！」ということです。文化活動でも、市民が自らつくり上げたり参加したりという、自らが主体となって楽しむ小さな文化を育くむことも、プログラムとして地域で取り組んではどうかということです。

4つ目は、3つ目の方向性と大きな関係がありますが、特に地域の中での活動はややもすると個別的な活動になりがちなので、交流会を開催したり、あるいはメール、ホームページという情報システムを活用して、さまざまな団体がネットワークを組めるような場、あるいは仕組みをつくってはどうかということでした。

5つ目が、小さな文化活動を支える仕組みということです。課題3に対応したご提案ですが、地域に残余している公共施設を文化活動の場としてもっと有効活用できる柔軟な仕組みをつくったらいいのではないかと。そのためにはNPOが管理するような仕組みを考えていく必要がありますし、市民、民間の活動を支援する施策を考えていく必要がある。そういったことが5つ目のポイントとしてあると思います。

これらから、さらに「自然と共生する文化を育てる取り組み」「先住民族の英知に学ぶ取り組み」「文化やスポーツを教育に生かす取り組み」「地域の人材や組織をつなぐ取り組み」「小さな文化活動を支援する取り組み」という5つのキーワードを抽出しました。

ご参考にしていただければと思います。以上です。

白井会長 ありがとうございます。前回のまとめをご報告いただきました。課題1の部分は前回の阿部さんのお話を中心にまとまっています。課題2は大沼さん、課題3は飯塚さんのお話をそれぞれ軸にしながら、討論で出てきたものをまとめています。取り組みの方向として5つありますが、これらは後で出てくる施策と噛み合っていくと思います。

このまとめについて何か疑問等ありますでしょうか。

(「なし」と呼ぶ者あり)

(2) 事務局説明(施策の基本方針)

白井会長 それでは施策の基本方針について事務局からご説明いただけますでしょうか。
事務局(調整課調整担当係長) それでは資料2の説明をさせていただきます。

これは、5つの基本目標ごとに市の関係部局によるプロジェクトで検討した、今後3

年間に重点的に取り組むべき施策の方向をまとめたものです。当分科会で議論をしていただく4つの重点戦略課題ごとに1枚にまとめてあります。上段の「現状と課題」は第1回の分科会で説明したものを箇条書きに整理してあります。中段の「施策の基本方針」は市長の施政方針「さっぽろ元気ビジョン」をベースに、この3年間に行政が重点的に取り組むべき施策の基本方針を整理したものです。下段の「施策」は施策の基本方針に基づいて実施する具体的な施策を示したものです。

重点戦略課題：芸術・文化の薫る街の実現

それでは1ページ目「芸術・文化の薫る街の実現」について説明します。

現状と課題につきましては、芸術・文化への市民の関心の高まりに応じて芸術の森、K i t a r aなどレベルの高い芸術・文化施設が充実してきており、これらの施設を生かして、優れた芸術・文化鑑賞の機会を充実させるとともに、芸術・文化振興の担い手を育成していくことが大切である。そして一方で、市民レベルの音楽・演劇等の公演や絵画などの展覧会が市内各所で行われるなど、市民自らが芸術・文化活動を実践していることから、これらの活動を支援していく仕組みづくりが重要であるとしています。それから、都市の個性や魅力を高めるため、札幌の歴史、伝統文化、文化遺産などを大切にし、これらを基礎に新たな文化を創造・発信していくことが重要であるとしています。

これを受けた施策の基本方針は、世界都市札幌にふさわしい質の高い芸術・文化に親しむことのできる環境をより一層充実させる。市民が街のいたるところで芸術・文化の楽しみを味わうことができ、それを外にも発信する文化の薫るまちづくりを進める。そのためにも、誰もが気軽に参加できる身近な文化活動の振興に取り組む。また、地域の優れた文化遺産の保全と活用を推進するとともに、伝統文化の継承を支援し市民理解の促進を図る。

それを受けての施策ですが、まず「芸術・文化活動を担う人材の育成」についてです。これからの時代を担う青少年が芸術・文化鑑賞に親しむことのできる環境を充実するとともに、札幌の芸術・文化振興の担い手の育成を支援する。

次は「芸術・文化交流の促進」についてです。芸術・文化活動団体のネットワークづくりと情報発信を進め、合わせて国内外との交流を促進します。

「芸術・文化活動促進のための環境づくり」では、札幌ならではの質の高い芸術・文化に市民が親しむことのできる環境を充実させる。誰もが気軽に参加できる身近な文化活動の振興に向けて、既存施設の有効活用と活性化を図り、練習の場、表現の場を確保します。

「芸術・文化活動の振興」については、芸術・文化活動に取り組んでいる市民やN P O、ボランティアなどの活動拠点の整備や活動を支援します。また、市民の主体的な活動を支援するための仕組みづくりを進めていきます。

「文化遺産の保全・活用と伝統文化の継承」については、地域の優れた自然や文化、

史跡などの文化遺産の保全と活用を推進します。地域に根ざした個性豊かな文化の振興を支援するとともに、自然との関わりの中で育まれてきたアイヌ文化の豊かな知恵と伝統の継承を支援し、市民理解の促進を図ります。

重点戦略課題：スポーツの魅力あふれる街の実現

次に「スポーツの魅力あふれる街の実現」についてです。

現状と課題としては、競技中心から身近で気軽に楽しめるものへという、スポーツ活動に対する市民ニーズの多様化や新たなスポーツ観が生まれていることを挙げています。子供たちのスポーツ機会が減少するとともに身近な外遊びの場が不足し、特に冬のスポーツ活動が停滞傾向にあることが、子供たちの体力、運動能力の低下とともに問題になっています。企業運動部の休廃部などにより優秀なスポーツ選手たちの受け皿となる活動場所が不足し、競技力の向上に大きな影響を与えています。スポーツ観戦を楽しんだりイベント運営を手伝うなど、見る、支えるなどの形での参加もスポーツ活動としてとらえられるようになって、スポーツへの関わり方に広がり生まれてきています。コンサドーレ札幌のように、その活躍がまちの誇りや元気の源になるなど、市民の財産となっている地域密着型のプロスポーツを活用したまちづくりが重要であるとしています。

それを受けた施策の基本方針です。市民の誰もがスポーツを楽しむことができる環境づくりを進めるとともに、札幌ならではの冬のスポーツの新たな楽しみ方を発信します。スポーツにおける札幌ブランドを高めるため、地域に根ざしたプロスポーツを市民と育てます。さらに地域におけるスポーツ活動団体の連携・融合を進め、一つの地域スポーツクラブとする仕組みを検討します。

それを受けての施策です。「スポーツを楽しむ環境づくり」については、市民の誰もがいつでもどこでもスポーツができるために、学校開放の充実など利用しやすいスポーツ環境を整えるとともに、スポーツの場を拡大します。地域におけるスポーツ活動の担い手である団体の連携、融合を進め、それぞれの活動拠点となっている区体育館や学校開放などの施設を一体的に活用し、一つの地域スポーツクラブとする仕組みを検討します。

「スポーツ情報の提供や人材確保の仕組みづくり」については、民間の情報を含めたスポーツの総合的な情報を市民と協働して発信したり、「スポーツ人材バンク」などの登録制度を設け、要望に応じて人材を派遣する仕組みづくりや、地域における指導者育成・活用の支援を進めます。

「トップスポーツの積極的活用」については、コンサドーレ札幌などのプロスポーツが地域密着の育成活動を進める場合の、施設や人材などの資源の効果的な活用・集積を進めます。

「ウインタースポーツの重点化と調査・研究の推進」については、札幌の特性を生かして、ウインタースポーツを重点スポーツとして位置付け調査・研究を進めるとともに「2007年ノルディックスキー世界選手権大会」を市民ぐるみで盛り立て、ウインタ

ースポーツへの関心を高めます。

「健康づくり運動とスポーツ振興の連携」については、健康づくり運動からさらに発展して、市民のライフスタイルに「身体づくり」が定着するような施策を、スポーツ施設や保健・医療関係と連携しながら進めていきます。

重点戦略課題：自立した市民に育てる教育の推進

次に「自立した市民に育てる教育の推進」です。

現状と課題につきましては、社会の変化やライフスタイルの変容に伴い、家庭や地域社会の教育力が十分に発揮されない状況にあります。それから、非行やいじめ、不登校が依然と存在しています。少子化や核家族化に伴う子供同士、特に年齢が異なる子供同士の交流機会の減少などから、子供の社会性が育まれにくくなっている状況にあります。社会全体が大きな転換期を迎え、大人だけではなく子供たちも夢や目標を築くことが難しくなっているということです。自ら学ぼうとする意欲の低下が初等、中等教育段階から高等教育段階にまで及んでいるということがあります。それから国際化、情報化、科学技術の進展や環境問題への関心が高まっています。

これを受けた施策の基本方針です。子供たちの思いやりと豊かな心を育む環境づくりと学びの意欲を育てる教育を推進することにより、自立した市民に育成します。また、人間尊重、国際理解、環境問題、情報化など今日的課題に対応する教育を推進します。

これを受けた具体的な施策です。まず「思いやりとゆたかな心を育む環境づくり」についてです。学校教育においては、教育ボランティア、外部指導者、生徒の心の悩みを解決できる人々など、家庭や地域社会のさまざまな専門家との連携体制を一層充実するとともに、非行やいじめ、不登校に対する取り組みを進めます。子供たちが社会の一員としての自覚、責任を高めるため、地域活動への参加や世代間交流、ボランティア体験や野外活動などの取り組みを推進します。それから、子供たちの成長や生活に必要な社会体験や自然体験などの自主的な活動を支援するとともに、子供たち一人ひとりの権利を尊重した取り組みを進めます。

「学びの意欲を育てる教育の推進」では、学校教育においては、発達段階に応じて子供たちに基礎的・基本的な知識、技能や学び方、思考力、判断力、表現力などの確かな学力を身につけさせるとともに、学校施設など教育環境の整備を推進します。障がいのある子供一人ひとりのニーズに応じた教育の充実や、地域で共に育む教育を推進します。また高校教育においては、生徒の個性を尊重し、多様な選択肢を提供するため、特色ある学校づくりを進めます。最後に人間尊重という下りですが、具体的に言いますと、一人ひとりが互いに人間として尊重し合うこと、平和を愛する心を持ち国際感覚を身に付けること、環境への責任ある行動が取れること、情報を活用できる能力を身に付けることなどの今日的課題に創造性豊かに取り組む力と意欲を育てます。

重点戦略課題：さっぽろを支え、発信する人づくり

次に「さっぽろを支え、発信する人づくり」についてです。

現状と課題については、個人の価値観やライフスタイルが多様化する中で、さまざまな学習や活動に取り組む市民が増加している傾向にあります。それから、まちづくりをはじめ、多様な分野でNPOなどによる自主的な公益活動が活発化していること。札幌圏に集積する多くの高等教育機関を生かした多様な学習機会を提供することが求められていること。また、高等教育機関が有する高度で専門的な教育を行うための人材・施設を生かして地域社会へ貢献することが求められていることとしています。

これを受けた施策の基本方針です。市民の誰もがさまざまな学習に取り組み、その成果を地域の活動などに発揮できる環境を整備していくとともに、市立大学の設置や高等教育機関との連携強化に向けての取り組みを進め、まちづくりを担う人材を育成します。

具体的な施策では「多様な学習機会の提供とその成果を発揮できる環境づくり」については、地域社会やボランティア、NPOなどとの連携をさらに深め、市民の身近な場所での学習機会を充実させるとともに、学習やその成果を生かす活動を支援します。それから、市民にとっての身近な情報拠点としての図書館サービスの拡充や、地域住民のニーズに根ざした学校施設のさらなる開放に取り組めます。環境問題や環境保全活動に対する理解や取り組みを進めるための環境教育や、司法制度改革における裁判員制度の導入等を視野に入れた司法教育など、新たな学習機会を提供してまいります。

最後に「市立大学の設置と高等教育機関との連携強化」です。市立大学を設置し、その高度な教育・研究機能を生かすことで、地域における産業振興や保健、医療の充実、芸術・文化の向上など、地域貢献に積極的に取り組んでいきます。さらに、札幌圏の大学間ネットワークづくりを進め、各大学が持つ多様な教育・研究機能をまちづくりに活用していきます。高等教育機関と行政が連携し、さっぽろ市民カレッジなどの講座事業の充実を図り、リカレント教育を推進してまいります。

以上です。

(3) 意見交換(施策の基本方針など)

白井会長 それぞれ4つの重点戦略課題について「現状と課題」「施策の基本方針」、具体的な「施策」についてご説明がありました。このことについて議論するのが今日のメインになりますが、始めに提出していただいたレポートについてご説明いただき、その後には議論するという形で進めていきたいと思っておりますがいかがでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

白井会長 お手元にある資料をページの順に説明する形で進めていきたいと思っております。

それでは私から始めます。非公開メモと書いてあるように手元のメモなので、公開し

ないという処理をお願いします。

私がコメントしたのは後半の2つの重点戦略課題「自立した市民に育てる教育の推進」「さっぽろを支え、発信する人づくり」です。

「自立した市民に育てる教育の推進」の具体的な施策の「学びの意欲を育てる教育の推進」というところで「基礎的・基本的な知識・技能や学び方、思考力、判断力、表現力などの確かな学力を身に付けさせる教育の推進」とありますが、今日、学力低下論についてはさまざまな議論があります。その議論が難しいのは、低下している学力は一体何なのか、具体的な実態の把握が弱いからです。

よく引き合いに出されるものに国際比較調査・研究がありますが、では具体的に札幌市の子供たちはどうなっているのかという客観的なデータはないわけです。また、子供たちの学習意欲が低下した、夜寝るのが遅くなった、食事が不規則になった、家族の中で団欒をする機会が減ったというようなことが言われるようになりましたが、それを裏付けるようなデータがあるかという、必ずしも十分なものがあるわけではない。そういったことからこの種の基礎学力、学習意欲、日常生活、生活時間などの現状把握、基礎的な調査・研究が必要ではないかと思いました。

それから、学校施設などの教育環境の整備についてですが、私たちは「教育環境の整備」というと建物やIT環境をどう整えるかという「物」を考えますが、同時に、人の環境整備ということも合わせて重要なことではないかと思います。例えば、札幌市の小中学校に相当な台数のコンピュータが入っていますが、一人の先生が30数名の子供を指導するのはなかなか大変で、現実には個別的な指導が必要です。そういったときに、地域の人々がボランティアとして支援すれば、学習面でもいいでしょう。また最近、家庭科で調理やミシンを扱うときに、地域の保護者が積極的に参加することが増えてきています。中学校では、進路指導の時間に職業調べということをやるということもあります。第1回ときには中島さんが映画について小学校でお話をされたということもわかりましたし、そういったいろいろな形での地域の人材の活用ということです。

それから、算数や国語などの基礎教科の指導についても、習得のレベルには違いがありますので、場合によっては個別指導が必要になります。そういったことに対して学校と地域の人材をうまく活用できるシステムづくり、学校の中で学校と地域の人をつなぐようなコーディネータを含めた人的な環境の整備を考えていいのではないかと思います。

国際理解に関しては、アメリカの場合には、母語が英語でない人々のための第2言語としての英語(ESL)があります。札幌だけでなく日本にはそのようなシステムがあまりありません。それから、子供は学校にいますので比較的早く日本語を習得できますが、保護者はなかなか習得できない。例えば集団下校をしなくてはいけない、学級閉鎖をしなくてはいけないという緊急の連絡があったときに、学校の先生方からは、日本語の習得レベルが不十分な親御さんに伝えるのが非常に難しいということを知っています。そういったコミュニケーションを円滑にするような通訳などの支援システムの整

備も必要だと思います。

次の重点戦略課題「さっぽろを支え、発信する人づくり」の施策には「多様な学習機会の提供とその成果を発揮できる環境づくり」とあります。その中の「市民の身近な場所での学習機会の充実」は、一般的には個人のQOL (Quality Of Life)、生きがい向上のための生涯学習と位置付けられますが、学習のスキルを獲得することは、個人の雇用機会の増大にもつながることであり、この分科会の問題であるとともに経済・雇用ともリンクする問題だと思います。

図書館のサービスについては、夜間延長ということがよく言われますが、将来を見据えた場合に、図書館のサービス内容は、本を貯蔵してそれを貸すという狭い意味だけではなく、マルチメディアの利用が増加してきているので、図書の検索、アクセス方法にしてもパソコンを利用することが大事になってきます。また、VTRやDVRの操作方法を地域の人がスキルとして学ぶような研修の場も必要ではないかと思えます。そういった場合に、全て市の職員がやらなくてはならないということではなく、地域のボランティアをお願いすることも必要だと思います。それから、図書館をいろいろなサークル活動の場とすることも考えていいし、夜間延長に伴って、できれば地域の人が司書サービスに参加するようなシステムができないかと思えます。司書サービスのボランティアが現実化するためには、その種の研修も必要だと思います。図書館のサービスを拡大し考えていくということが必要ではないかと思えます。

「地域住民のニーズに根ざした学校施設のさらなる開放」については、これまでのご説明の中でも現在ある施設を積極的に利用したり、その利用方法についていろいろな工夫をするということが出ていましたが、具体的には、中央区で小学校が統合されますが、その際に廃校となる小学校を地域の文化活動の場として再利用することはできないかということです。問題は管理・運営をどうするのかですが、他都市の成功事例などを参考にしながら考えていくといいのではないかと思います。

それから「市立大学の設置と高等教育機関との連携強化」については、新聞報道で、南区にある市立高専と市立高等看護学院をベースとして、芸術と看護・保健の2つの柱がある市立大学をつくるということをやっています。専門教育を重視することはとても大事ですが、それとともに教養教育のバランスがとても大事だと思います。医学、芸術は人に関わることで、人の文化の営み一般についての知識、理解がなければ難しいからです。地域の大学との連携に関しては、単位の相互互換の拡充があります。具体的に言いますと、国立大学でも編入、転入をする学生が非常に増えてきています。その場合には、ほぼ100%、他の大学で履修した単位は認めるということになっています。それから、札幌市内の私立の大学間でも単位の互換が出てきていますが、互換をさらに進めていって、ある大学で履修するとそのまま他の大学でも認めるような形にするくらいのことが必要だと思います。

地域との連携に関しては、生涯学習のためのプログラム提供という面に加えて、札幌

市の職員の研修、札幌市の諸施設や機関との研究連携についても考慮すべきではないだろうかと言われました。実際に私どもの大学では、地域に向けた公開講座等を開くようにという文科省からの働きかけがありますが、現実には、お客集めが大変だということがあります。札幌のようにたくさんの大学があるところでは、公開講座の数がとても多いので、差別化を図ること自体が難しいことになってきます。そうであれば、そこだけは大いにするのではなく、札幌市職員の研修を行うとか、札幌市のいろいろな研究機関、高校との連携を行っていくということが考えられます。高校との連携としては、例えば札幌の市立高校の高校生が大学の単位を先取りするようなことや、進路を考える上で大学の施設、スタッフも含めて利用、連携していくようなことも考えていいのではないかと思います。

それでは続けて大沼さんお願いします。

大沼委員 札幌市民がスポーツに親しめるシステムづくりを、ということが一番大きく考えています。

学生は卒業するとスポーツができなくなってしまう。学校開放は当たる確率が低いので、自分たちだけで場所をとれる状況ではない。一方で、定常的にスポーツをしたいというニーズはあるので、新規の人たちとこれまで利用している人たち両方が利用できるシステムはつくれないのかなと思います。区体育館、プール、学校開放、運動公園、テニスコート、野球場等とありますが、区ごとにどういうものがあって何ができるのかということをはっきり明示できたらと思います。一応はありますが、課題を抱えたときにどこに話を持っていけばいいのか、スポーツをやりたいけれど窓口はどこなのかが分からない。

総合型地域スポーツクラブづくりは文部科学省も進めています、一つだけ危惧しているのは、札幌市には体育振興会がありますので、その現状と課題をしっかりと押さえた上でスタートしてもらえないだろうかということです。

それからパイロット事業として思い切ったクラブをつくってみることも考えるべきではないかと思います。振興会は主に住宅地域にあり、市のまちなかは一般開放で誰でも使える形で棲み分けができています。市街地にいつでも遊べるような場を思い切って考えてもいいのではないかと思います。

区の体育館は区ごとにありますが、場所を貸すということだけではなく、地域のクラブ活動を支援する相談業務や職員がクラブを紹介するということを考えてはどうかと思います。札幌市は転入・転出が多いので、スポーツをやりたい方にクラブを紹介するようなシステムができないのだろうかと思います。大学ですとサーバーを1台用意しており、そこにアクセスしていつでもクラブを検索できるようなシステムがありますので、そういったことも一つではないかと思います。

総合型地域スポーツクラブは多種目、多世代、多様ということがありますが、急に答を出すのは難しいと思いますので、単一種目のいくつかのクラブがまとまり、活動場所

を共有するという形で総合型づくりができればいいのではないかと思います。それから、技術レベルのことを考えると指導者養成ということがありますし、専門家の支援が重要になりますので、体育協会と連携をしたほうがいいと思います。

プロスポーツクラブが2つありますが、実はクラブとチームは違います。チームというのはフィールドでの勝利に向けた組織で、クラブはもう少し広い意味で、試合に出られない人も含めた組織です。2つのプロスポーツクラブを本当に札幌に根ざしたものにしていこうと考えるとまずいのではないかと思います。例えば「コンサドーレの日」や「ファイターズの日」というような、ファン感謝デーとは違うものを設けてはどうかだと思います。札幌市や北海道はコンサドーレに対して何億円も出資や融資をしています。つまり、一般の株式会社に対して行政が支援しているという形です。何億円分の利子はあるはずですが、プロのスポーツ選手はボランティアで来てくれと言ってもなかなか来てくれないし、コンサドーレの選手を呼ぶと一日で20～30万円はかかると思いますが、札幌市が出資しているのだから利子分ということで来てもらってもいいのではないかと思います。トップスポーツと地域に根ざしたスポーツの間の「つなぎ」を考えないと、両方中途半端になってしまう気がします。

先ほどの市の説明の中にNPOのことがありましたが、NPOをやっている方はほとんどプロの方だと思います。本当の専門家ですから、そういった人々を生かしたり活躍させる場をつくっていかないと、両方が不幸になってしまう気がしますので、そこをつなぐ仕掛けをつくらないといけないと思います。

今考えついたことですが、札幌NPOファンドというものをつくって、プロ集団だからこそできる場や機会を新しく立ち上げて、発信していける仕組みはできないかと思います。

FISのノルディックスキー世界選手権大会についてですが、ノルディックスキーは人気がないので、市民の関心を向けるのであれば、大通公園を封鎖して「大通ウォーク」といってクロスカントリーをするくらいのことをやらないと、なかなか認知されない気がします。健康のこともありましたが、中心部のイベント等の際には単ではなく、スポーツだと健康や文化というように、いろいろなものがセッションして新しい何かができるようなことにトライすることが考えられないかと思います。

事務局からの報告と私なりの考えを合わせてお話しました。

白井会長 ありがとうございます。それでは杉森さんお願いします。

杉森委員 一つは音楽や演劇を発信する場所への支援を考えてもらえないかということです。先ほどの廃校の利用ということがありました。よくNPOで廃校の利用を考えようということが言われますが、なかなか学校を利用するのは難しいです。札幌市内で廃校を利用して学びの場を立ち上げたところがありますが、期限が決まっており数年で退去しなくてはならなかったということがあります。場への支援を考えられないのかと思いました。

「地域の活動の場を生かす工夫を」については、私は月曜日から金曜日までフリースクールをしています。金曜日の午後はスポーツをしています。小学校1年生から大学生までが一緒になり、学校を終えた子供たちもやってきて、児童会館を貸してもらい大人数がやっています。そういった場をどのようにすると、もう少しリンクして生かせるようになるのかと思います。

「総合学習の場として」については、私は札幌市内の中学校に音楽の総合学習で行ったりしますが、それで子供たちがスクールに興味を持ち、総合学習のレポートをつくるために見学に来ます。ただ、1回か2回来て話を聞いてレポートになって、それが一体何になるのかといつも思います。そうではなく、総合学習の場として、もっと子ども達が何かをつくれるような場になってほしいと思っています。私たちはいつも半年がかりでプランをつくりますが、そのプロセスが子供たちにはすごく大事です。どのようにしたかを聞くのではなく、プロセスに参加することが子供たちにとって大事だと思います。ベトナムのストリートチルドレンとEメールで交流をし、2年前から計画を練っていますが、今年の3月にライブに行きます。それは一般の高校生と不登校の子供たちが一緒につくっています。それが本当の総合学習かなと思います。自分でプランを立てて、ものをつくって、体験して、それが自分自身に返ってくる、そういったプロセスを体験する場として、もっと生かしたいと思っています。

「不登校児が来られる場所として委託を」については、札幌市のフリースクールも何ヶ所もあり、民間のフリースクールもありますが、子供たちは「勉強だけでつまらない」と言います。子供たちに文化やいろいろなことを教えるという特色を出している場がありますので、そういうところと連携を組んで子供が育つ場所を考えてもらえないかなと思います。

以上です。

白井会長 札幌市の行っているフリースクールというのは相談指導学級ですか。

杉森委員 そうです。

白井会長 順番に重点戦略課題について議論していったほうがいいですね。

阿部委員 前回の会議の速報版をいただきましたが、2、3か所、訂正していただきたいところがありますのでお願いします。会議録4ページの3行目に「開拓史」とありますが「開拓使」に訂正してください。同じく4ページの8行目と6ページの大沼委員の発言の下から9行目に「サワミ」とありますが「サーミ」に訂正してください。

白井会長 どうもありがとうございました。

それでは一通り委員提出メモの説明が終わったところで1時間が経過したので、10分ほど休憩をして、4つの重点戦略課題について討論していきたいと思います。

(休憩)

白井会長 それでは再開させていただきます。4つの重点戦略課題について一つずつやっていきたいと思います。もちろん、4つの重点戦略課題は関連し合いますから、行きつ戻りつという進め方をせざるをえない面もあるかと思えます。

最初の「芸術・文化の薫る街の実現」について、フリーなお話をいただきたいと思えます。

「施策の基本方針」、あるいは具体的な施策について、自由にお感じになったところを出していただければと思えます。

中島委員 前は出席していないし分科会も違うので、頭の整理ができていないところがあります。前回の議論を読んできたのですが、僕は杉森さんがおっしゃる「小さな表現の場所」が一番のポイントだと思います。札幌市にはK i t a r aがありそれはすごく重要なのですが、第1回るときに言いましたが、少数者が参加できる、ないし少数者の文化を享受できるということが文化の成熟度だと思うのです。ですから「小さな表現」をどう確保するかが文化にとって最大の問題だと思うのです。ただ、僕も良い案があるわけではないです。

僕自身も20代は悪ガキで、ライブハウスとかで物を壊したりむちゃくちゃをやってきました。そういった場に対して行政が何らかの助成をするのは非常に難しいし、実践に対しては成立しにくいということがあります。表現には自由と社会的な責任のせめぎ合いという部分がありますから。そうなんだけれども、何らかの方法がないかと思ったときに、現在ある公的制度としては、やっぱりNPOだと思うのです。NPOに対する税の優遇措置がなされるようになれば一番いいですが、今は残念なことにその逆になりつつあります。ただ、基本は明らかに法律とかシステムということしか語れないわけで、そういったときにはNPOしかないかなと。だから、例えば表現の場自体がNPOとして申請しやすいシステムをつくれなにかと思えます。

僕が理事長をやっているNPOが一つありますが、それをつくるのを経験して、事務量の多さとすごさに大変しんどい思いをしました。もちろんNPO活動には責任が伴いますからそういうことをしなければいけないということもありますが、市民に対するNPOの最大の責任は情報公開だと思います。その情報公開がきちりできるのであれば、もう少し簡略化できるシステムが必要だと思います。道がNPOの管理をしていることは承知していますが、それを市の意見の一つとしてでも言えないか、何らかのシステムがつけられなにかと思えます。

原則的、理念的には、大多数の人たちが享受できるものではなくて、小さいいろんなものが享受できるということを成立させるのが、文化として非常に重要だと思います。アイヌ民族のことをマイノリティーといいますが、まさしくマイノリティーの文化を大切にしなければならぬと思えます。

これは市に対する質問も含めてですが、芸術・文化の重点戦略課題のところ「担い手の育成を支援」とありますが、文化課の助成事業がありますよね。あれは若い人たち

が何かをするときに申請できるシステムになっていますか。「青少年の文化交流」ということは書いてありますが、例えば若い子がロック音楽をやろうとか、何かをつくるときに助成できるシステムにはなっていましたか。例えば、短編映画をつくるというものには難しいのですか。

事務局（調整課調整担当係長） 難しいですね。

中島委員 何かをつくって発信する、表現することに対して、もう少し助成システムをつくらないといけないと絶対に思います。外に向けて発信していこうと明らかに書いてあるわけですから。僕のように言いたいことが言え、表現の場所がある人間はいいのですが、若くてそういう環境がない子たちが何かをやるためには、やはりそういうシステム、助成が必要です。ちょっと事業の名前が思い出せませんが、あれ（「芸術文化振興助成」のこと）を組み替えればいいのではないかと思います。そこをぜひ、新しい担い手をとということであれば考えていただきたいと思います。

もう一つは、環境・都市機能分科会で言ったのと同じことを繰り返すことになりませんが、活動拠点に関しては、モデルケースをどこかにつくることではないかと思います。はっきり言えば大通小学校です。あそこをいろんな文化の場にしていくことは、上田市長になったときに明らかに想定されていたような気がしています。この3年間でやる具体的なものとしてぜひ打ち出したいと思います。中身に関してはいろんな形で議論したいけれど、そういう具体的なものを何とかこの会議で出したい。結局何にもならなかったということは避けたいので、市の方と一緒に、最低限これだけはやりましょうというものを出したいと思います。その目標としては非常にリスクが低いと思っていますので、大通小学校を文化とNPOの場にするのは、ぜひ考えていただきたいと思います。

高田委員 中島さんに関連して申し上げたいのですが、資料2の「施策の基本方針」で「市民が街のいたるところで芸術・文化の楽しみを享受し」とあります。この「いたるところで」というところに私はこだわっているんですが、これがどういう意味を持つのかご説明いただければありがたいです。というのは、私は前回大道芸人のことについて申し上げたわけです。ですから、具体的にそういったことにつながっていくのであれば幸いですと思っていますし、私は経済・雇用分科会に入っておりますので、集客の問題、世界への発信ということにもつながるような形をとりたいと思っていますので。経済・雇用分科会でも申し上げましたが、助成金が出ているようでした。そうだとすれば、もっと拡大した形で、中島さんがおっしゃる問題とも関連するのではないかと思いますので。形にしなければ意味がないですからね。

事務局（調整課調整担当係長） まちのにぎわいというようなことと、小さな活動拠点がいろんなところにあるということですね。

高田委員 拠点は拠点として、発信のための大きなスペース、ステージが大通公園あたりで何とかならないのかなと思っています。いろんな優先順位、難しい問題がいろいろありますが、私はやることに意義があると思います。

白井会長 今高田さんがおっしゃったのは、屋根のついたハコに限定しないで、道路とかも含めてということですね。

高田委員 はい。保安の問題などありましようけれど、私はやることに意義があると思うのです。中島委員がおっしゃる大通小学校の活用もございましようけれど、文化と経済というのは表裏一体だと思っていますので、札幌の経済活性化も含めてあるべきだと思っています。だから「いたるところで」という言葉が気になるのです。

白井会長 飯塚さん、どうぞ。

飯塚委員 私も文言のことで一つ。資料2の1ページ、施策の1行目に「青少年が芸術・文化鑑賞に親しむことのできる環境の充実」とあるのですが、ここに「鑑賞」という言葉が入ってくるのは、このページがハイアート、高い芸術、K i t a r aとか芸術の森を想定したことが語られるページだからでしょうか。

事務局（調整課調整担当係長） そうですね。はい。

飯塚委員 今中島さんがおっしゃったように、鑑賞と同時に表現するということも非常に重要なことです。また、その2行目に「文化振興の担い手の育成を支援」とあります。これは「文化振興」という言葉が入っているので分からなくなるのですが、アーティスト、芸術家を育てるという意味ですか。

スポーツの部分でもそういうことがあると大沼さんも言われたと思うのですが、つまり、レベルの高い、芸術で言えばハイアートを振興していくことと、小さな芸術活動、表現活動を大切に、一人ひとりの人間にとって大切なものをたくさんつくっていきこうというその2つがある。資料2で言えば、後者は3ページ目や4ページ目に関わってくるようなことです。その2つの間をどのようにつなげるかを、提言にどう盛り込んでいったらいいのか。その辺を少し整理できればいいなと思いました。

中島委員 できれば両方でしょうね。

飯塚委員 もちろん両方必要なので、それをもっと分かりやすく、全部が含まれる言葉にしないで、両方をきちんと言ったほうがいいと思います。

それからもう一つ、3ページ目の「学びの意欲を育てる教育の推進」というところで、「思考力、判断力、表現力などの確かな学力」とありますが、これは「学力」ではなく「能力」だと私は思います。

それから、先ほどの白井先生のお話の、ボランティアをどのように位置付けていくかということが、私はとても面白いと思いました。つまり、従来ボランティアはどんなときでもお手伝いのというのでしょうか、「手が足りないからボランティアに頼もう」というふうに言われてきました。しかし、それではなかなかうまくいかない。そうではなく「主体的に」ということも言われる。ところがそれもなかなか難しい。それでボランティアをどうしたらいいかというのは、どんな分野でも言われ続けているのですが、白井先生のお話の中に、自分自身が成長するきっかけとしてボランティアを位置付けるというお話がありました。それは非常にいいかもしれない、そんなことを少しシステム化し

て、いろんなところでそういうことができるといいと思いました。

中島委員 せっくなので私も言わせてもらいます。環境・都市機能分科会でも出てきていることに連絡所のございます。地域の核になるものということで、連絡所や図書館、大沼さんが言われる地域クラブというようにいろんなものが出てきている。杉森さんもある意味で異文化がぶつかるような場所というものを出されている。それらを完全に一か所にまとめる必要はないのですが、飯塚さんがおっしゃるボランティアのことも含めて、何とかできないだろうか。これを区民センターにしてしまうと役所の管轄にあるようになってしまいます。地域に一つずつ、公設民営型でNPO的な運営ができるモデル的なものをつくるというイメージがあるのです。もちろん、連絡所と図書館と地域クラブ全部を一つの建物にというのは無理なので、それらが連携できる形になればいい。そこに専従の市職員はいるけれども、それはあくまでサービスのためであって、ほとんどの運営を地域の運営委員会というふうなNPO的なものがする形にできないかということがあります。

僕は具体的な考えを持っていないのですが、ボランティアということでは、東区のコミュニティFMでアナウンサーの養成講座というのをやっています。そこではボランティアのアナウンサーをやるためには自分でお金を払って養成講座を受けなければいけません。

飯塚委員 5,000円ね。

中島委員 ええ。大した額ではないですが。僕はそうしたことによって、逆にボランティア意識が高まると思います。責任を持ってやろうという形になる。先ほどの飯塚さんのお話にプラスすれば、そこでは次のボランティアを育てるための講座、研修ができる、市の職員も研修を受けられるというふうな場所にできないかと思ったのです。

飯塚委員 面白いですね。東区の札幌村ラジオの研修は、若い人から高齢者まで受講しています。

中島委員 それは、経済にも関わりますが、パート雇用ということにもリンクすると思うのです。

繰り返しになりますが、そこが連絡所がいいのかどうかは分かりません。

飯塚委員 いくつかの連絡所に情報交流センターというものがつくられつつあります。まだたくさんはないと思いますが、私が住んでいる八軒に第一号ができたのです。ここでは同じ建物の中に連絡所も情報交流センターもあるために、町内会や地域のいろんな人がごちゃごちゃになって、それがいい効果になっていると思うのです。いろんな団体がそこからんでいるわけですけど、それがうまく機能するための方法が必要ですね。

中島委員 そうですね。すでに建物があるのであれば、新しい建物を建てるのは愚の骨頂です。そこをより素敵にしていく、うまく活用していく方法だと思いますね。

飯塚委員 やっぱり組織の縦割りがそこに残ってしまうのですね。

杉森委員 今の話とちょっと違うのかもかもしれないんですけど、不登校の子供たちを見

ていていつも思うのは、社会、いろんな人にたくさん触れさせなくてはいけない、前に出してあげなくてはいけないということです。だから、うちはたくさんライブに出すようにしています。

先ほど中島さんが言われた廃校利用ですが、うちのNPOでも利用させてほしいといつも考えています。そこには、フリースクールやほかのたくさんのもものが集まっており、そこで子供たちを育てることができないか、そういうものを計画できないかといつも思うのです。

私はフリースクールをNPOとしてやっているのですが、個別で子供たちを育てることはできないと思っています。もっとたくさんものを見せたり触れさせる、前に出す必要があります。そのためにはもっとたくさん人の協力が必要だし、その協力の中で子供は育っていくと思っているので、そういうものがつくれないかといつも強く思うのですね。

飯塚委員 いろいろなものを一つの施設に入れるのはどこでも可能だというわけではありません。何かの機能を使うために、例えば印刷機を使うために、地域に点在しているフリースクール、町内会、老人会の人みんながそこに集まってくるとか、そんなことでもいいんじゃないかなと思います。

杉森委員 不登校の子が難しいのは表に出て行けないからです。そこが自分の場所だと確認されれば出ていくんですよ。ですから、まず最初にそこを育ててあげなければいけないのです。そこを育てるのには何か月もかかります。体育館に行くにも何か月もかかる、ライブに行くにしても3年かかるという感じなのです。うちの子供たちはレコード会社からCDも出してもらっていますし、表にどんどん出て行っているのですが、それでも7年くらいかかっているのです。そういった長いプロセスのところに多くの人の助けが必要なのです。普通の方がどこかを利用するようなことは、不登校の子供たちには難しいのです。

白井会長 議論が面白くなってきているところを中断するようで申し訳ないのですが、4つの重点戦略課題に沿ってまとめるということで、出てきた問題点を挙げて次に行きたいと思います。

一つは施策のところに「表現する機会」ということを入れるべきではないかということが出てきたと思うのです。つまり、飯塚さんの言葉では、ハイアートをエンジョイするというだけでなく、表現する機会をつくる、あるいは表現活動を助成するシステムをつくるということです。助成のシステムというのは必ずしも財政的な援助だけではなくて、練習したり表現する機会を設けるとか、あるいはそれを公知するサポートのシステムも含み得る広いことかと思えます。

それから、行政を含めてそれぞれの活動があるわけですが、それを実際につなぐのがなかなか難しいということがあります。それらをつなぎ、使い勝手をよくするためにインターフェース面をつくることも課題だと思いました。それには連絡所ということもあ

りましたし、コーディネーションもあるのかもしれませんが。

それでは次に2番目の重点戦略課題「スポーツの魅力あふれる街の実現」を中心にご議論いただきたいと思います。

高田委員 あ、私が申し上げたことはどうなっているのでしょうか。

私はいろいろな拠点だとかそういう管理的な部分は後から出てくる問題だと思うんですよね。場所だとか助成だとかは後の問題だと思います。今、札幌のまちをどう活性化するか、どう文化を振興していくかというときには、資料2にある「質の高い芸術」、それから私が申し上げた「街のいたるところで芸術・文化」という2つの振興だと私は思っております。それを押さえてはじめて今度は場所をどうするか、管理的な部分で時間はどうするか、助成はどうするか、そういうシステムの問題につながってくるわけです。

やっぱり一番先にアドバルーンを上げることです。そうでなければ、この会の意味がまったくゼロになってくると私は思うのです。

白井会長 私の意図は、資料2に挙がっていることのほかに出てきたこと、問題点をまとめたということでございますので、今、高田さんの言われたことは、当然含み得ることだと理解いただければと思います。

高田委員 常識的な中で私がとっぴなことを申し上げるのはおかしいのかもしれませんが、やっぱり、この会議が行われたということに私は大きな意義があると思うのです。それを位置付けたときにこの会議が生きてくるわけですから。管理的な、場所をどうするか、時間をどうするかというのは後から必ず出てくる問題でして、そのときに具体的にきちっとやっていくべきだと思うのです。ですから、今ここでは、札幌の経済の発信をする、文化の発信をするというところをよみがえらせなければならない使命があるわけですから、そういう使命感に燃えてやらなくてはいけないと私は思っています。

飯塚委員 ここで議論する方向が違うということですか。

高田委員 もうちょっと大きいスケールでいくべきだと思っています。

飯塚委員 「質の高い芸術文化に親しむ」という文言としてここにあるだけではなくて、それについてももっと具体的な施策を考えるべきだということですか。

高田委員 ですから、それは形に表していかななくてはならないわけですから、大きな形にしていくということです。それは札幌の活性化だと思っておりますから。

飯塚委員 具体案を出すことについては.....。

高田委員 ですから、ハイアートの問題だとか、不登校の問題だとか、演劇の場所の問題だとかが出ておりましたが、それをどう表現して発信するかということが一番求められていると私は思っているんですよね。ですから、そういうところに焦点を当てて、それから、順々にこういうふうになっていくことだと思うのですよね。

私がとっぴなのかもしれませんがね。

飯塚委員 とっぴとかではなくて.....。

中島委員 僕がこの会議にイメージしていたものは、2つあって、1つはまさしくその

ビジョン……。

高田委員 そうです。だから、そのビジョンを語りたいと私は言っているのです。

中島委員 分かります。この会議ではそのビジョンとさらにその具体性、やっぱりその両方があるこそだと僕は考えています。具体性というのは今僕たちがいろいろ言ったことです。

高田委員 でも、助成が先、場所が先というのではなく、やはりビジョンが先にならなくちゃいけないんですよ。そこから下がってきて、ではどうすべきだということに至らなければ。

中島委員 小さないろんなものがあって、だからこういう方向なんだということもあると思うのです。その両方が常にあると思うのです。

高田委員 そうですけど、それで終わってしまったら両方なくなってしまいます。

中島委員 大丈夫ですよ。これだけのものになったら終わらないと思いますよ。

白井会長 4つの重点戦略課題を一通り議論したいと思うのですが、その前に高田さんから重要な提起がありました。私たちの任務はビジョン編をつくるということで、施策は行政がつくるということをおっしゃっているのですね。

高田委員 そうです。

白井会長 ただ、私はそのビジョンは、現状、現実のいろんな問題をどう認識しているかということと、現状をどう変えていくかということが相互に働きかけあってつくっていくものだと思います。現実的な問題とイメージを行きつ戻りつビジョンをつくっていくということです。

それでは次にいきたいと思います。

阿部委員 一言だけお願いします。

白井会長 いいですよ。

阿部委員 最初の重点戦略課題についてお話ししたいことが一つあるので聞いていただきたいのですが、実は国の重要無形民俗文化財に札幌ではアイヌの団体しか指定されていないのです。札幌ウポポ保存会という団体ですが、意外に市民に知られていません。昔のアイヌの人たちの歌や踊りを中心に指定されているわけですが、教える人たちも高齢になってしまっています。また、北海道中からやってきた人たちが継承しているのでなかなか札幌独自のものは無いのですが、それでもこの10年近く、相当がんばって継続してやっています。

アイヌの団体ということで、これまで周りを気にしたりしてなかなか今までできませんでした。この10年くらいにしっかりできるようになってきた。これからはこの12月にオープンした小金湯の施設でやることができるわけですが、なかなかあそこまでいくのは大変です。

この札幌に国の重要無形民族文化財に指定された団体があり、これを中心に今札幌の若い青年男女が歌や踊り、楽器を取り入れて、新しいアイヌの芸術の創造にがんばって

いるわけです。この後継者育成、あるいは場の提供ということを考えていきたいと思いたすので、ぜひよろしくをお願いします。

高田委員 ついでと言ったらおかしいですが、自然に親しむ文化ということで。私は経済・雇用分科会に出ているものですから、それとオーバーラップするところがあります。

藻岩山、円山の自然林の利用は林野庁の許可だと思います。ですから、植林をすることになると簡単ではないでしょうが、もしそういうことになれば、林野庁を説得してもやるんだというくらい大きい気持ちを持ってやらなければなりません。

「規則がこうなっているからできません」で終わっているんですよ。できないところをやると私たちは掲げているわけですから。ですから、林野庁がだめなら別のところに行くというくらいで、できないものもできるようにしていくという意識がなかったら、絶対だめなわけです。そういう常識を破ることに私たちの意義があると思っています。

白井会長 おっしゃるとおり、私たちは素人の集まりで、議会とか行政の集まりではないわけです。ここまで、現実にできるかできないかはまず置いておいて、それぞれがどうしているかを話し合ってきました。その現状、それから基本方針、次に施策と考えていきたいということです。

それでは「スポーツの魅力あふれる街の実現」ということに関していかがでしょうか。

阿部委員 あのすいません。変なことを言って申しわけありませんけれど、うちの子供は市立中学に行っているんですが、体育館が狭くて廊下で着替えたりしているので、ぜひ大きい体育館を建ててるように、市長に言ってくれと伝言されてますんで……。

中島委員 今、高田さんができないことでも言おうよと言われましたが、僕はまさしく象徴としての大通公園の利用だと思います。大沼さんのご報告で、冬を活用するスポーツとして歩くスキーをというお話がありましたが、これは本当にそう思います。あまり大げさなことばかり言えないかもしれませんが、僕は将来的に大通公園が森になることを望んでおりますから。大通公園が、札幌市にお客様がお越しになったときに、まず「札幌ってこういう街なんだ」ということがすぐ分かる場所だと思っていますから……。

高田委員 私は大通公園を森にするのは反対。

中島委員 すみません。環境・都市機能分科会のことかもしれませんが……。

高田委員 楽しくいきましょうよ。肩張ってやるのではだめだと思うのよ。もっと楽しくゆるやかにいきましょうよ。私は大道芸人の広場にしたいの。大道芸人を世界から呼び寄せるくらいの気持ちを持っているのよ。

中島委員 あ、その議論だけになるとまずいと思いますので、そういう意見もあるということ……。

白井委員 文化の多様性ということで、いろんな意見があるということ認めるということ自体がこういう会議では大事だと思いますので。

高田委員 そう思います。敢えて申し上げました。

中島委員 僕は自分自身が表現側ですので、大道芸人は大賛成なんですけれど。とりあえず大通公園でやるという話もあるということでしょうか。

僕は、冬をどう楽しむかというような象徴的な考え方をどこかに盛り込んでいくべきじゃないかと思います。今それが現実問題としてできないのであれば、いっぺん1日交通を全部止めてイベントとしてやるということも考えられると思います。前に実験的に自転車でやりましたよね。あれくらいのことはできるわけですから、ぜひやってはどうでしょうか。

高田委員 賛成します。

中島委員 それともう一つは、資料2の2ページの一番上にある「気軽に楽しめるものへ」ということをもう少し具体的な言葉にした方がいいと思います。「観戦」から「自分たちが楽しむ」ということで、文化で言えば「見る」から「表現する」になりますが、やっぱりそれをスポーツにも盛り込んで、そこに対して何らかの応援をしていけるシステムづくりなんじゃないかと思います。

高田委員 そういう意味では、大通を大いに活用するということですね。

中島委員 そうですね。

杉森委員 参加しやすい場所ではあるのかもしれないですね。容量的にはあまり大きくないイメージがありますが。

市のご説明の中で「スポーツにおける札幌ブランドを高める」というお話がありましたが、コンサドーレは札幌ブランドを高めているんですかね。そこにすごい疑問があります。何かほかに札幌ブランドがあるのではないかと思います。

事務局（スポーツ企画課企画係長） コンサドーレだけでなく、札幌と聞いて、スポーツでどんなイメージを全国の方が持つかという、やっぱり札幌オリンピックに象徴されるような冬のスポーツだと思っんですよ。冬のスポーツが活性化した状態であるならば、札幌のウィンタースポーツはまさにブランドだと言えらると思います。また、日ハムやコンサドーレも市民密着のプロスポーツを標榜していますから、そういう中で何かやっていって愛される球団となっていくのしょう。それはやっぱりブランドと言っていいんじゃないかと思います。別に、コンサドーレとかそういうものだけというイメージではなくて、札幌という思い浮かべるスポーツがあればいいなというくらいです。それは第一にウィンタースポーツだと思っています。

中島委員 僕は原則としては、一応コンサドーレはあった方がいいと思ってるほうです。ただし、それに対する税金の使い方にはいろいろな問題があるのかもしれない。ただ、やっぱり日ハムとは違う大きなポイントは、要するに市民の出資でできている地域クラブということだと思っんですね。プロ球団がそのまま移転してきただけの話ではないと思っってます。コンサドーレは企業だけでつくったものではなく、市民でつくっているという形態に近いものだと思っっているの、僕はそれがもう少し気持ちよく育ててもらえるといいなと思っっています。

白井会長 事務局に質問ですが、今日は時間的に4つの重点戦略課題をカバーするのは難しい感じもします。残り時間で後2つをカバーしたほうがいいでしょうか。

事務局（調整課調整担当係長） そうですね。

白井会長 それでは8時半までということですが、次の3つ目の重点戦略課題「自立した市民を育てる教育の推進」、それから次の「さっぽろを支え、発信する人づくり」、この2つと一緒に議論をしたいと思います。

杉森委員 「思いやりと豊かな心を育む環境づくり」というところの最初に「学校教育における家庭や地域社会の様々な専門家との連携体制の一層充実」、次に「非行やいじめ、不登校に対する取組の推進」とあります。この2つはセットで、あくまでも学校が中心となって進めるということなのでしょうか。

高田委員 つながった方がいいのかもしれませんが。

事務局（調整課調整担当係長） そうです。セットです。

杉森委員 セットですね。ということは、学校があくまでも中心となってということですか。

白井委員 取り組みの推進をする主体は誰かということですね。

杉森委員 はい。

高田委員 この前、地域に関して中教審のことでちょっと申し上げましたが、こういう形にすれば、いじめの問題にしても非行の問題にしても教師と地域がお互いにつながっていくのではないかと思います。まだ中教審で形にはなっていないのかもしれませんが、札幌市としてはぜひやるべきでないかと思います。

杉森委員 これはずっと言われてます。道教委のフリースクールの代表者会議にも出ていて、もうずっと何年間も言われていますが、それでも不登校者の数は変わらないんです。いつも会議で問題になるのは、ここでは「学校教育における」とありますが、学校が主体になって変わらなかったものをなぜこのまま続けるのかということなんです。まだこれを言い続けるのかと思いました。これでは解決しないことがとても多いんですよ。学校中心ということが出てくるということは、やっぱり変わらないのかなと思ってしまいます。

枠組みとしてつくりやすいということはあるでしょうが、本当に今までどおりの学校中心ということでもいいのでしょうか。実際、不登校の子は民間のフリースクールなどにたくさん来ています。そうでありながら、なぜ一言も書かれないのかというところに疑問を感じます。

高田委員 私は家庭教育もあっていいと思います。家庭教育、社会教育の中でこういった問題も出てきているわけですから。学校だけがとおっしゃるのはよく分かります。ただ、私は家庭が一番問題だと思っておりませんが、それは個の問題ですからなかなかそこに踏み切れないということもあるのかと思います。

白井委員 推進の主体というのは、学校と家庭、それから地域、この3つだと思います。

実際にいじめと不登校の問題があり、特に不登校に関しては杉森さんをはじめ、NPO等の民間の受け入れ施設が拡充されてきていることはご存知の通りです。それから最近、札幌市教育委員会では不登校についての手引きをつくられました。ご紹介いただいてもよろしいですか。

事務局（教育推進課指導担当係長） 今、臼井先生からお話がありました「生徒指導第12集 不登校への対応」は北海道新聞にも掲載されましたが、私どもから札幌市の教職員に配ったものです。内容的には不登校に対してどのように先生方、学校が対応していくかということが、関係機関と連携を含めて書いてあります。以上です。

臼井会長 推進の主体をもう少し明記する方がいいというのは、私も今うかがっていて感じました。

飯塚委員 質問をよろしいですか。ここに施策として書かれていることが、ビジョン編に盛り込まれる具体的な文言なんですか。

事務局（調整課調整担当係長） そうです。事業レベルにまで落としこんではいけませんから、基本的には事業を推進していく上での考え方という感じです。

飯塚委員 具体的なことはどこに書かれるのですか。

高田委員 私は、この施策の一番目の文言ですが、これは要するにこれからは地域との連携で学校運営がなされていくと解釈しています。

事務局（調整課調整担当係長） そういうこともあり得るかもしれませんが、それだけではないです。

高田委員 はっきりと、そういう形にすべきであるとアドバルーンを上げたいですね。それでなければこの会議の意味がありません。私はそういう意見です。そうしますと、不登校の問題にしても身障の方の問題にしても、皆が理解し合っていく形になると思います。

先生お一人では見きれない部分があると思います。でもそこにPTAや地域が関わってくることによって、お互いを理解し合うことにもなります。父兄同士の関係も理解するし、お互いに啓蒙し合う部分も出てくるのではないかと思います。不登校の方にしても、いじめにあっているお子さんの親にしても悩んでいると思います。その悩みをどこへぶつけるかというときに、子供のお友達の親に言ったところで解決しない部分もありますし、先生以外にいないのではないかと思います。そういった協議会のようなものができれば、その中で理解し合い啓蒙し合うことができるのではないのでしょうか。札幌にそういうものがまだないとすれば、特区のように何校かにそれを設けて試験的にやってみて、その結果が良ければ広げていくという形にしないとうまくいかないと思います。

この前、地下鉄の中で床に座りこんでいる子供のことを申し上げましたけれども、家庭の教育力が全くないわけですから。先生が学校でしつけを教えなくてはいけないということが先になってくるようでは終わっていると思います。そういったようなところで、もう少し地域との連携を大義をもって進めることが私は大事だと思います。

阿部委員 私もこの3番目の重点戦略課題を見て、子供の教育のことを言っているけれど、また先生に任せるんだらうかという気持ちです。

私たちの先祖の考え方では、赤ちゃんは神様だと言います。訳の分からない言葉を使っていますが、あれはまだ人間の言葉を理解していなくて、神様の言葉で話しているというわけです。そして、お年寄りも同じだと言います。ある程度の年齢になって訳の分からないこと言い出すと、あれはおかしい、ボケた、痴呆だと言いますが、そうではなく、だんだんまた神様になって神の世界に帰るんだということです。

年に何回か長老といいますが、おじいちゃん、おばあちゃんを集めて、昔の話を聞いて、どうやって生きてきたのか、日常生活のことからすべて聞くようにしています。そういう話から自分たちの生き方を教えてもらうわけです。

今回、老人に対する視点は、病院に入り、デイケアに行き、死ぬのを待っているような考え方ばかりですが、そうではなく、本当は色々な面で力を発揮してもらわなければいけません。孫と遊んでもらう、あるいは色々なことを代わってやってもらうことは実際に私たちの生活であることです。そういうことがこういう場に出てこない。お年寄りが除け者にされているような気がします。

ですから老人クラブなんかは活発に活動しているわけですから、駐車違反の取り締まりや色々なことをやってもらうといいのではないかといつも人に話します。ただ、老人クラブに、お金を出して腕章をつけてもらうとはりきってやってくれるんじゃないかと言ったら、俺たちを使うのかと怒られたことがありましたけれども。お荷物ではなく、もっと活躍してもらって、子供、孫にきちんと物事を教えてもらう。それができるすごい人なんだという見直しが必要ではないかと思います。

そういう視点が全くないので、物があふれてお金がいっぱいあって、日本は大国だ、経済大国だと言っていますが、心は貧しいのだと思います。もう一度お年寄りを邪魔者にするのではなく、知恵を見直すことをぜひ考えてほしいと思います。

白井委員 確かに生涯学習ということで、高齢者の方の生きがいにつながることを積極的にやっていこうと言われていました。あるいは高齢者の社会参加がいわれたり、学校の道徳教育でも「高齢者を尊敬し大事にしましょう」と教えられ、また、国民の祝日にもなっています。問題は、今阿部さんがおっしゃったように、我々の高齢者に対する見方、考え方をどう変えていくかということです。あまりにも経済の論理で、役に立つ人と立たない人という形が強い感じもしますので、老いることについての見方を考えることも大事な教育の取り組みだと思います。

その他、参加の場をつくるとか、保育所や学校の施設を高齢者の福祉施設と合築して交流の場をつくるという取り組みの例もあります。

いずれにしても、生涯学習という中で、高齢者の位置付けをもっと具体的にしたらいいという考えとしてうかがいました。

阿部委員 「異年齢間の交流機会の減少」「世代間交流」という言葉がありますが、これ

は5才、10才という狭い範囲でとらえないで、ぜひ今言ったおじいちゃん、おばあちゃんも含めた異年齢間の世代間交流を考えてもらいたいと思います。

高田委員 私はこの「異年齢間の交流」は中高一貫教育のことも含めて書いているのかと思っていましたが、そうではないんですか。

事務局（調整課調整担当係長） どちらかということと学校の外ということですよ。

高田委員 とてもいいことだと思っていますので。

中島委員 具体性ばかりでいつも申し訳ないのですが、地域の中で子供たちとお年寄りが交流できる場をつくることだと思います。政策としては、そういう場所をどうやって増やしていくかだと思います。例えば映画館をやっているとしてもそれは分かります。「何でこんな映画を年寄りが見るんだ」という状態のときがあります。「80才が主人公の映画になんで若いやつが来ているんだ」という逆の状況もあります。そういった環境の中で、見終わったときにお互いが通じる瞬間が出る。やはりそれは機会だと思います。そういったチャンスをつくっていかないといけないわけですが、お年寄りも子供も出会えるそういった場所が、現在は政策的にやってもいかなければならないと思います。

白井さん、阿部さんがおっしゃった、高齢者の方を積極的に活用するということは、パート雇用とボランティアでできることもありますから、それはぜひと思います。

高田委員 厚生労働省のモニターをしており、その問題についてのレポートを出しています。

実はある区の区民センターで、いつも戸が開いているものですからよく見えるんですけど、暮をなさっています。暮というのは二手も三手も先を読むわけですからすぐ頭が冴えてくると思いますが、いつもいらっしゃっている方がいます。趣味の世界、生涯教育というのはとても素晴らしいことだと思いますが、お年寄りにはもう少し違った行動があってもいいのではと阿部さんと同じ考え方を持っています。

中島委員 暮もいいんですよ。

高田委員 悪いとは言っていないですよ。

大沼委員 なぜこの現状と課題から基本方針の1番目が出てくるのかが分かりません。例えば「環境づくり」「学びの意欲を育てる教育を推進」をすれば上の課題を解決できるというのは、どういうロジックになっているのかが分かりません。

ただ、なぜと考えるとだんだん分かってくるのは、学校が多分、法規でガチガチに身動きがとれない状態だということです。その中で、例えば札幌市の教育委員会なり行政がこういった方針でもっていきたいということ、我々も考えたいと思います。

高田委員 もう一つ、1991年に市立高等専門学校が開校してもう10年以上経ちますから、かなりの数の卒業生がいると思います。デザインをしているような人たちですから、今の議題についていい意見を持っているんじゃないかと思います。だからそういった人たちがどういう経過を辿って今どうあるのかと思いました。今度大学になることになれば、札幌市に良い意見を述べるチャンスがあるのではないかと思います。まちな

み、山なみづくりなんて申しあげましたが、デザインの人たちはそういった視点で考えるユニークなものを持っているんじゃないかと思います。

中島委員 高田さんの意見にはすごく賛成で、市立大学の話は別のところで行われているのでここで言うことではないかと思いますが、そういう専門学校の卒業生、現場を生きた人間たちがこういう会議に参加するのはすごくいいと思います。

もう一つ、僕が言うのは変ですが、せっかく税金を市立大学に使うのですから、絶対にアイヌ文化学科だと思います。それは北海道しかできません。ぜひこの機会に文化をきちっと伝えることができる学科を、定員50人でもいいからつくるべきだと思います。もう道立大学ができる可能性少ないわけですし。

高田委員 北海道にはずいぶん芸術家が多いんですよ。絵描きにしても何にしても有名な人がたくさんいますから、大学になってくればデザイン学科から相当な人が出てくるんじゃないかと思います。人づくりという意味でも、そういう人たちが卒業したときに札幌にどのように還元できるかということがあっていいと思います。

白井委員 市立大学は市民の大学となるわけですから、当然、我々がどんなビジョンを持っているかということは大事なこととしてあります。今まで市立大学に関する議論がなかったですが、アイヌ文化や地域の伝統文化、暮らしを集約したようなものを学問としてもって来るといっても、ご意見としてあるかと思います。

高田委員 その考え方は非常に高邁じゃないですか。

阿部委員 中島さんありがとうございました。市立大学を設置するということがもし盛り込まれたら、アイヌ文化学科を設置するように一所懸命働きかけていきたいと思います。ご存知のように、イオル再生構想というのが道の施策にありまして、7つの地方がその地域に指定されておりますが、その他にアイヌ研究推進センターを設置しなさいということが有識者懇談会の国への答申にありました。国立のアイヌ民族博物館のようなものをイメージしております。また、その答申にはアイヌ文化学院の設置も盛り込まれました。

ところが今国がこういう状況なので、アイヌ民族研究推進センターもこれから何年かかるか分からないわけです。ただ、カナダ、アメリカなど世界の先住民族施策の先進国を見ると、国がやる前に地方自治体がやる、あるいは各州が先住民族施策としてこれだけ仕事をするので、お金が足りないから連邦政府に補助をしていただきたいというあり方です。ぜひ札幌市としても、こういう市立大学を設置するということであれば、アイヌ民族に関する講座をやっていただきたいと思います。

前日も言いましたが、この4月から北海道教育大学の道内5校でアイヌ文化講座を開講する予定です。学校の先生になるであろう生徒たちに、300くらいのアイヌの単語を覚えてもらうということも盛り込まれているようです。また、道新文化センターではこの4月からまたアイヌ文化講座を開講する予定です。そういうことで、私もがんばりますのでご協力をよろしく願いいたします。

白井会長 今、市立大学のことについて出ているわけですけど、そのほかのところではいかがでしょうか。

大沼委員 よろしいでしょうか。施策のところの最後の言葉をずっと見ていました。これらが具体的にどうなのかは分からないのですが、「充実」「支援」「促進」「確保」「しくみづくり」「推進」というすべて相対的な評価でしかないのですね。実は僕も大学で自己点検評価というシートを書かされるのです。具体的に書けと言われるのですが「推進」とか「充実」と書いてしまいます。ちょっとでも充実すれば充実ですし、1ミリ動いても推進です。

例えば文化とか人づくりというのは経済指標でいったらおそらくマイナスなんですよ。それを市として評価する際に、何を元手、評価基準にするのか。その評価基準を文化・人づくり分科会として打ち出せないかなとこれを見ていて感じました。

白井会長 文化が経済指標として見るとマイナスだとおっしゃったのですが、これはどうでしょうか。マイナスとは限らないところもあると思うのですが。

高田委員 私はマイナスにはしたくないから先ほどから言っているんですよ。

大沼委員 それにはかなり長いスパンで見ないといけない。

高田委員 そう思いますよ。

中島委員 3年で元を取れるようなことには間違いなくありません。

高田委員 だから、やはり小さな物差しと長い物差しと両方でこの会議はやっていくべきではないかと思います。

中島委員 しつこいようですが、この資料2は、あくまで元になる参考資料だという考え方でいいわけですよ。だから、ここをこう添削するということではないと僕は思っています。ただ、自分でこれに代わるものをつくるだけの能力はないですから、その部分はお願ひして、プロジェクトチームと一緒に作り上げると考えていいわけですよ。

高田委員 例えばPMFは1990年にできたわけですから、10年以上のスパンで今のものであるということになります。「文化の薫るまちづくり」と書いてありますが、Kitaraにしても時間をかけてそういうふうになってきているわけですから、今、それこそ中島さん、飯塚さん、杉森さんがおっしゃる場を提供してやっていくことによって、少しずつ少しずつ広がりが出てくるということだと思っております。時間もかかるかもしれないけれど、私は経済効果も大きいと思います。ですから、必ずしもマイナスではないと思っています。

飯塚委員 これも具体的なことに属することかもしれないのですが、経済効果でいえば、これは大変大きいかと思っております。主に美術の世界ではアーティスト・イン・レジデンス（海外の芸術家を一定期間地域に招いて、実際に創作活動を行ってもらう制度）ということが言われます。

北海道なり札幌がパワフルにこれから発展していくには、いろいろなものと直接触れ

合うことがとても大事です。それはただ単に作品を見るということではなく、それをつくっている人と出会うということです。それは美術だけではなく、音楽でも演劇でもいろんなジャンルで言えます。スポーツでもそうかもしれません。札幌はコンベンション都市ということを行っていますので、札幌に滞在してもらおうということもあります。あるいは観光面のホスピタリティを高めることにも役に経つかも知れないし、アーティスト・イン・レジデンスを感じさせられる何かをどこかに盛り込めるといいなと思いました。

高田委員 私もそう思います。すばらしいアーティストが出るかもしれませんし。

阿部委員 一つ聞きたいことがあります。4ページの施策の真ん中のところに「環境教育や司法教育」とあるのですが、司法教育というのは何ですか。

事務局（生涯学習推進課推進係長） 実は国で司法制度改革として裁判員制度というものを検討しております。そうなると一般の国民が裁判員として裁判に関わることとなりますが、そのときに司法の基礎的なことはここで理解していただきます。それが自治体の仕事になるのか、裁判所の仕事になるのかはあると思いますが、ご存知のとおり、市長は弁護士出身であり、こういうことにも取り組んでいきたいということで、掲げております。これから考えていかなければならない施策の一つということで掲げております。

以上でございます。

白井会長 よろしいでしょうか。

中島委員 そうであれば、成人学校のシステムをもう一度できないかなと思います。要するに夜、社会人が学べる場所です。その中にはアイヌ語講座もあっていいと僕は思うのですが、できれば、杉森さんがおっしゃった、何かをつくるプロセスを体験できるという形を考えたい。例えば映画をみんなで上映しようとか、プロセスの中で考えていくような、いわゆるカルチャーセンターとはちょっと違った形です。小学校を利用した成人学校が昔、創成小学校であったと思いますが、僕はあのシステムをぜひ復活させたいと思うのです。それは、一つの交流の場にはなると思います。今おっしゃった司法制度のことも含めて、そういう場所を市の管轄でどんどんつくっていければと思いました。それが大通小学校の跡地になればいいなと思っています。

（４）議論のまとめと全体会議への報告内容の確認

白井会長 今日はずいぶんいろんな面の議論が出てきましたし、現状と課題は別として、具体的な施策というのは一つのたたき台で、それをベースとして我々はアイデアを出し合って持っていくということかなと思っています。

全体のまとめを今することはできません。29日の全体会議でこれまでの分科会の議論のまとめを、事務局側と相談させていただいて、簡単にご報告したいと思っています。

3 閉 会

白井会長 それではこれで閉会といたします。どうもありがとうございました。